

WORLD HERITAGE

NEWS

世界遺産ニュースレター

Letter

世界遺産富士山の
後世継承に向けて

特集

国際シンポジウム

「富士山学を拓く—世界遺産富士山から読み解く人類世の自然と文化」

「富士山の日」フェスタ2018

三保松原の景観改善対策の状況

研究員コラム

富士山南麓の幻の名産品「善徳寺酢」

vol.

36

March, 2018

「富士山学を拓く―世界遺産富士山から読み解く人類世の自然と文化」

松島 仁

静岡県富士山世界遺産センターでは、「富士山学」を構築し、その国際的・学際的・総合的な拠点となることを目標としています。

富士山学は、富士山の自然や歴史、文化に関する基礎的・個別的な調査研究にはじまりますが、それに留まりません。それらを総合・止揚しながら、富士山を軸とした、グローバルな視野からの普遍性を備えた比較研究。さらに文理の枠を越境し人間と自然・社会環境の関係を包括的・総合的に読み解き現在を知り未来への提言とする学際研究。それこそが私たちが拓く「富士山学」です。

3月2日から4日にかけて、センターでは、その富士山学について検証を試みる国際シンポジウム「富士山学を拓く―世界遺産富士山から読み解く人類世の自然と文化」を開催しました。これは、センターの開館を記念するものであるとともに、文理融合の研究連携を進めてきたふじのくに地球環境史ミュージアムとの2回目の合同開催にもなります。

3月2日富士宮市民文化会館における専門セッションでは、「移動と人類世―移住、巡礼、遺産」「東西文化交流のなかの富士山イメージ」「富士山とその周辺環境の過去、現在、未来」の3部形式で、のべ12の研究発表とパネルディスカッションを行いました。休憩中のティーブレイク

には、センターのボランティアで静岡大学学生の佐野久美さんにも参加いただき、海外で第一線の活躍をされる研究者と地元富士宮の若者の交流ももたれました。

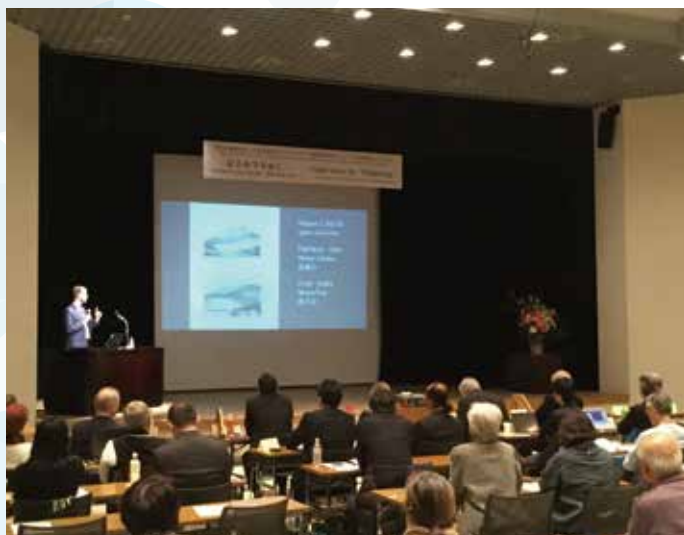
3月4日富士ロゼシアターにおける公開シンポジウムでは、まず私松島と町田宗鳳ミュージアム客員教授が問題提起を行いました。その後、歴史学の泰斗で富士山についても高い見識をお持ちであるイリノイ大学名誉教授のロナルド・トビ先生、火山としての富士山研究で広く知られる静岡大学教授の小山真人先生に基調講演、ポーランド・クラクフでの第41回UNESCO世界遺産委員会議長をつとめられたヤツェク・ブルフラ先生、川勝平太静岡県知事に特別講演をいただきました。そのうえでセンターの大高康正准教授、田代一葉主任研究員に「富士山学研究の最前線―『世界遺産富士山 信仰の対象と芸術の源泉』を究める」の研究発表、昨年「世界文化遺産『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」登録に尽力された葦津敬之宗像大社宮司にご講演をいただきました。

3月3日には、白糸ノ滝や村山浅間神社など世界遺産富士山の構成資産を中心にエクスカリオンといわれる視察旅行を行いました。

シンポジウムにはアメリカや中国のほか、イギリス、フランス、オランダ、ポーランド、スロヴ

ニアなど多くの国からご参加いただき、それぞれの専門も人文科学系と自然科学系諸学の多岐にわたりました。3日間を通じ国や専門の枠を取り払いつつ親交を深め、最後にはかけがいのない「友人」となり別れを惜しみました。

「友」となること。それこそがセンターとミュージアムがめざす文理融合、そして「富士山学」の礎であると、シンポジウム全体のオーガナイザーとして自負しています。



3月2日 富士宮市民文化会館での専門セッション

「富士山の日」フェスタ2018

平成30年2月23日、静岡・山梨両県は、ハイランドリゾートホテル&スパ（山梨県富士吉田市）において、「富士山の日」フェスタ2018を開催しました。

関係者約400人が出席される中、川勝知事、杉山県議会議長の挨拶等につき、「富士山と水」をテーマに、両県世界遺産センター長によるリレートークやFUJISAN FILM FES・2018（シヨートムービーコンテスト）などが行われました。

今回は、昨年12月に本県の世界遺産センターが開館し、先行して開館していた山梨県のセンターと揃って迎える初めての「富士山の日」フェスタとなりました。

両県は今後、富士山の顕著で普遍的な価値の後世への継承などに加え、富士山に関する学術研究や情報発信の拠点である世界遺産センターにおいても連携の強化を図ってまいります。



【リレートークで講演する遠山館長】

三保松原の 景観改善対策の状況

世界文化遺産「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」の構成資産に登録された三保松原は、登

録過程において、砂浜の保全に大きな役割を果たしてきた消波堤の存在が審美的観点において望ましくないとの指摘を受けました。

静岡県では海岸保全と景観改善を両立させるため、平成25年8月に三保松原白砂青松保全技術会議を設立し、平成27年3月までに計4回の会議等を通じて検討を重ねてきました。

L型突堤+養浜の整備後イメージ



現在の状況 (H30.2.14撮影)



対策前 (H28.5.12撮影)



函体据付状況 (H30.1.20撮影)



検討の結果、既設の消波堤に代わる工法として、必要な防護機能を確保でき、視認性も改善されるL型突堤と養浜の組合せを基本とする対策を決定し、現在、羽衣の松付近から富士山を望む場合に影響の大きい箇所消波堤をL型突堤に置き換える工事を進めています。

工事は、平成28年11月にL型突堤を構成する函体の製作から始め、平成30年2月には現地の海岸において函体の据付けが完了するなど、2月末現在、工事の進捗率は約70%となっています。今後も引き続き、平成31年3月の完成を目指して整備を進めてまいります。

富士山南麓の幻の名産品「善徳寺酢」

静岡県富士市今泉に鎮座する日吉浅間神社の現境内は、明治時代初期の神仏分離までは富士山東泉院せんいんという真言宗の密教寺院の境内でした。東泉院は、戦国時代から富士郡下方五社の別当職を勤めていました。下方五社とは、富士市内に鎮座する富知六所浅間神社・滝川神社・今宮浅間神社・入山瀬浅間神社・日吉浅間神社の五つを指しますが、東泉院の歴代住持は、この五社の年中行事や神領の管理・運営に中心的役割を果たしていました。

この東泉院にかつて伝わっていた名産品に善徳寺酢があります。江戸時代の文化十五年（一八一八）完成の地誌『駿河記』巻二十五・富士郡巻二の中に、「善徳寺酢」項があげられています。そこには、「神租難波御在陣の時、東泉院住職法印快印手製の酢を献上す。甚御意に叶ふ。以来御吉例として献上すべきの旨上意によりて毎年献上す。其後住持快雅代願によりて御免。然れども御吉例なれば絶えずまじきよし仰せられるに付き、今に毎歳手製するなり」と記されています。ここから、東泉院では善徳寺酢（ないしは善徳酢）と呼ばれる手製の酢が名産品として造られており、恒例として徳川将軍家（「神租」は徳川家康）に献上されていたとあります。

善徳寺酢は、当時の社会でかなり著名な銘柄だったようです。寺子屋の手習本『江戸往来』（寛文九年（一六六九）刊行）には、覚えるべき商品名として「善徳寺酢」があげられていますし、人見必

大が日本の食物全般についてまとめた元禄八年（一六九五）刊行の『本朝食鑑』の「酢」に関する項にも、「酢は、（略）大抵水の善いものを扱ふことが先決である。昔から和泉酢を上としている。（略）近代では相州の中原の成瀬氏で造られるものが第一等で、駿州の吉原善徳寺で造られるもの、同州の田中の市上いちじょうで造られるものがこれに次ぐ。以上の三所の酢は、いずれも泉州の醋の法に基づいて、これにいろいろ工夫を加えたものである」とあります。

名水あるところに銘酒ありと良く言いますが、酢も同様で、「近代」（ここでは元禄期頃）に善徳寺酢は、相模国中原（神奈川県平塚市）、駿河国田中（静岡県藤枝市）と並び「三所の酢」と括られ、一般に名産品として周知されていました。こうした背景には、善徳寺酢が江戸において広く一般に流通していた可能性が考えられます。しかし、東泉院による徳川将軍家への酢献上も、第六世住持快雅の頃の十七世紀末頃には辞退が認められており、その後江戸時代の十八世紀頃には廃れてしまった銘柄のようです。こうした酢があったこと自体、現在地元でも全く忘れられてしまっており、ついには富士山南麓の幻の名産品となってしまいました。

謎の多い善徳寺酢ですが、例えば「三所の酢」のひとつ相模国中原では、酢の製法は「二子口伝」の製法として秘されていたものでした。つまり口頭で跡継ぎのみに伝授されるものであれば、絶え

てしまえばそれまでですし、親切なレシピ集などというものは残りません。東泉院に伝来していた資料群の六所家旧蔵資料の中に、善徳寺酢は製造に際して善徳寺村の百姓を召し使っていたとする文書がありますが、酢の製法に関する文書、醸造に際して利用していた民具等は残念ながら伝来していませんでした。

但し、そんな中で、善徳寺酢の具体像を示す唯一の資料と成り得るものが、岡山大学池田文庫所蔵の『黑白精味集』という延享三年（一七四六）成立、江戸川散人孤松庵養五郎編の料理書です。酢に関する項目もあり、伝聞をもとに善徳寺酢の具体的な製造法についても記されています。これによると、幻の善徳寺酢はいわゆる米酢のようです。この江戸時代の製造法をもとに、富士山南麓の幻の名産品「善徳寺酢」が復活する日も来るかも知れません。

【参考文献】

- ・『本朝食鑑』1（東洋文庫296、平凡社、一九七六年）。
- ・松下幸子・吉川誠次・山下光雄「古典料理の研究（二三）——『黑白精味集』について——」（千葉大学教育学部研究紀要）第三六巻二部、一九八八年。
- ・『酢・酒と日本の食文化』（日本福祉大学知多半島総合研究所・博物館「酢の里」共編、中央公論社、一九九八年）。
- ・大高康正「善徳寺酢に関する一考察」（『六所家総合調査だより』第九号、富士市立博物館、二〇一一年）。
- ・『六所家総合調査報告書』古文書①（富士市教育委員会、二〇一四年）。

（大高 康正）